地域景観の議論のためのメモランダム

佐々木　葉

正会員　博士（工学）早稲田大学創造理工学部社会環境工学科
（〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1，E-mail:yoh@waseda.jp）

地域計画の一環である景観計画を考えるために，地域景観の記述方法およびその捉え方自体を議論したい．そのための予備的ノートとして，地域景観に関する研究を概観し，そこからの展開可能性を探った．対象地域の実態的特性記述から，景観体験の主体の内面に着目した記述まで，４つに大別して既存研究を位置づけ，それらを踏まえた今後の議論と研究のための参照事項を整理した．

キーワード:地域景観, 地域計画, 研究レビュー,

１．はじめに

景観計画とは，地域計画*1) の一種であり，土地利用計画をも内包する．人々の暮らしの営みのために必要とされる社会基盤や土地利用を的確に操作することで，経済的発展，生活の質の向上，環境の保全を行うことをミッションとした地域計画の議論に対して，景観という観点を加えることの意義は何であろうか.

まずは，計画内容を人々のイメージに即したものにすることがあろう．K.リンチの言葉を借りれば，imageability およびlegibilityの観点を地域計画に導入することの必要性である．これは行動の合理性という機能的要請の延長線上にもあるといえよう．ついで，現代においては，地域の経済的発展（右肩上がりの発展のみでなく持続的発展，あるいは維持）のために景観の質の向上が求められ，そのために景観という評価軸による地域計画の検討が有意義となる．さらにはコミュニティの維持やソーシャルキャピタルの形成といった，人的資本の形成のためにも必要という考え方もあろう．以上は社会がその活動を展開する場である地域の計画，すなわち人類の歴史と共にあり続けた人と環境の関係のマネジメントの獲得目標の一部として景観を位置づける，という考え方である.

その一方，計画という操作への意図や野心，場合によっては義務感を必ずしも伴わず，知的好奇心から地域の景観に迫るアプローチがある．地理学的景観論の延長である．見たい，知りたい，わかりたい．この知的好奇心が地域の眺めに向けられれば，なぜこの地域はこんな景観なのかに興味がわき起こり，その景観の特色自体を記述し，それを生成させている人々の暮らしや環境の特性を要因として明らかにしたくなるのが人間というものだ.文化的景観も現在はその保存と活用に軸足がおかれすぎているように思うが，ことの始まりは，多様な文化のコレクションの一つであり，その学術的調査と記録の質が中心課題といえよう．その上で，見つけて，知って，わかった貴重な景観は，守りたいと思うのが心情で，そこから保存さらには活用という計画意志が生じ，文化的景観が展開する地域の計画が議論される．これは文化的景観に限らず，貴重な自然環境や歴史的資源を含む地域においても同様である.

さて極めて大胆であるが，地域計画に景観という柱が立つその背景と意義について上記のように確認したうえで，地域の景観とは何かを議論したい．本稿は，そのための予備的ノートとして，計画というコンテクストで地域景観を論じるために不可欠な地域景観の記述方法，およびその前提ともなる地域景観に対してどのような角度からアプローチしていくのかについて整理をすることを試みる．具体的には，地域景観に関わる既存研究を概観し，そこから著者が考える地域景観の論点の可能性を逐次展開し，最後にそれらに基づいたまとめを行うという方法で進める.

２．地域景観に関する既存研究とそこからの展開

先述した背景に関する確認に照らせば，地理学や歴史学といった分野における地域景観に関する研究もレビューの対象とするべきであるが，ここでは計画という関心に力点を置くため，土木，建築，都市計画，造園といった分野に対象を限定する．学術情報検索において「地

域」and「景観」を検索語として抽出した情報をもとに既存研究を概観した．もとより網羅的なレビューにはなっておらず，著者の関心から目にとまったものを抽出している．対象は基本的には査読付き学術論文とし，個々の論文だけでなく，一連の研究を包括した例としても扱っている*2)．以下に，地域の環境の状態にアプローチするものから，景観を体験する主体側にフォーカスするものという大きな分類軸にそって，４つに大別して述べる．またとりあげた研究に対しては，基本的に目的，手法，得られた知見や成果によって概略を紹介するが，各論文著者の意図から離れた本稿著者の問題意識から見た特徴や課題，展望を加えていく．

（１）地域の実態的特性に基づいた景観的特質の記述

a)坂本による混在化地域に関する研究[1)2)]

目的：土地利用の混在化を，田園地域に居住地を求める都市住民が流入する現象ととらえ，首都圏レベルで地理学的景観を指標として地域を類型化する．また市町村や集落という従来の計画単位だけでなく，景観の同質性に基づいた景観域という空間的領域を構築する．

方法：基本的に地形および土地利用に関する数値データによる分析をおこなう．景観指標として地域原景観率（市町村の総面積に対する林野と耕地面積の割合）と地形景観タイプの二つを設定し，それらを社会的指標や土地利用データとの関連で意味づけし，各指標間の相関性などから対象地を類型化する．また景観域の設定は景観生態学の概念を参照している．

知見：現在の土地利用という結果としての状態指標だけに基づいた地域特性の記述ではなく，その結果にいたる過程に影響すると想定される地形や営農者人口などを内包した景観指標によって実態を把握しようとしている．このことは混在化を上述のような動的現象としてとらえることと呼応している．また土地利用分析に多い行政界単位ではなく，メッシュ単位データから各種指標の類似性によって地域類型を行い，地域の変容状態の把握や当該地域の土地利用などの計画に反映させようとしている．

特徴と課題：主に土地利用に関するデータを用いた地域区分や類型化，およびそのモデル化の研究は少なくない中で，本論文では研究のアプローチを「景観を視点すること」と明示している．そこには，地理学的景観に見られる景観形成の要因を含めた現象としての地域の状態を扱うという意図が感じられる．しかし実際にはその要因側に属する社会的指標と関係は相関性のみによって分析されており，景観生態学の概念の導入においても，類型化されたエリア間の関係性分析など景観生態学の重要な特質までは継承していない．なお，この論文では場所の眺めや人の認識には一切言及していない．ここに紹介する他の論文が地域の物理的状況を対象としながらも少なからず眺めや認識に触れていることに比して，より地理学的といえよう．

b)北原による景観単位と構造に関する研究[3)]

目的：顕著な特色がない平凡ともいえる低い丘陵地の景観の基本構造をその視覚的特質の分析を通して把握し，自然景観を開発の前提となる環境資源として位置づけるための枠組みを提示する．

手法：フォトグリッド（地図上に作業グリッドを重ねその交点からの写真撮影を行う）と現地踏査，および地形図の読み取りを行い，地形図からは，稜線・河川図，地形断面図，地形分類図，土地利用図を作成している．これらのデータから定性的に，比較的独立性の高い視覚的まとまりを自然景観単位として抽出し，K．リンチのイメージマップや樋口の景観の構造の表現方法を参照して，景観構造を記述している．またその単位と歴史的な集落の位置とも参照し，環境の意味づけを行っている．

成果：定性的ではあるが，地図に表現される情報と機械的に設定された場所の眺めというモードの異なるデータを総合して地域の景観的単位と構造を視覚的に表現する試みを，初期におこなった研究といえる．

c)土肥による景観単位に関する研究[4)]

目的：土肥による一連の研究では，景観イメージがほぼ同等な一定の広がりをもつ実態的空間上の範囲を景観単位と定義し，また地域は複数の景観単位の組み合わせで記述できると考え，これを検証することを目的としている．

方法：仮説的に景観カテゴリーを設定し，各カテゴリーの代表的場所の眺めの映像を準備し，これを地域を構成する景観カテゴリーの面積比に対応させた割合で編集した映像を被験者に提示し，その印象値をもって，複数の景観単位から構成される広域な地域景観の印象を把握しようとしている．

知見：こうした方法についてはひと先ず置くとして，地域景観の体験に時間的な概念を導入していることは興味深い．これは，「地域景観とは，点的または線的な場所や都市を構成する単位としての地区といったスケールを越え，一点からの視覚的把握は不可能ではあるが，他の地域とは異なって認識されるような広がりを指すもの」という土肥による地域景観の定義に基づくものであると考えられる．

また北原は後述する論文のなかで「地域景観は建築を始めとする人工的要素と地形・植物等の自然的要素によって構成される視覚的慣行であり，同時に，それを体験

する人間の意識と不可分な存在として地域住民が共有する日常生活の上に成立している」と述べている[5]．ここに挙げた北原と土肥による研究においては，特定の視点からの眺めに集約されない面的広がりを体験した場合の視覚的印象をできるだけ即地的に表現することをめざしており，これは，地域景観の議論の基本的課題である．また両者がともに体験という時間概念を含んだ思考を景観に対して設定している点は興味深い．

（２）集団表象に記された地域景観の特徴の記述

a)北原の小学校校歌の歌詞分析に関する研究[5]

目的：小学校校歌が有する地域景観に対する公共イメージを育てる媒体としての側面に着目し，住民が共有する校歌に謳われた地域景観イメージを明らかにする．

手法：あるスクリーニングをしたうえで全国98都市2665校の校歌の歌詞から地域に存在する事物を具体的に指示している名詞を抽出し，データとする．出現率の傾向，クラスター分析による地域イメージの類型，各類型の代表例と実際の空間の対照を行っている．

成果：全国レベルでの分析を行うことで，校歌に出現する景観要素が実際の地域イメージ構成要素と対応していることを検証している．

課題と特徴：歌詞という注目データの特性と市町村単位での分析によることから，あくまでマクロな地域イメージの把握となっている．その一方で，景観計画の議論のプロセスに校歌を題材とすることで市民が興味を持ち，またそこからより具体的な記憶や認識の導出可能性があるという効果が意識され，景観計画策定手法上のメリットが想定されている．

b)清水による地相系景観に関する研究[6]

目的：地相系景観を，地形や土地の様子によって決定される景観構成要素の組み合わせからなる景観と呼び，これによって地域特性の一端を把握し，さらにそのなかから人々に共通のイメージとして認識され，かつ評価されているものを抽出する．

方法：地図記号の種類が多い旧版地形図から，そこに現れる透視景を著者がスケッチによって書き起こして視覚化し，対象地域に繰り返し出てくるものをパターンとして抽出する．その景を，集団表象とみなされる名所図会，小説，字名や地物名称と対照させ，対応関係を確認することで，それら地相系景観の共有性および価値の根拠としている．

成果：分析の過程から，地相系景観を集約的に集めた場所が地域のなかには複数存在しており，そこが地域景観の要となることを指摘している．

課題と展望：地形という環境の特性とそこに構築された道，集落などの人工的要素によって形成される地域景観の基盤とも言える対象が，人々の景観的認識対象となっていることを示しており，地域景観とは何かという問いに対する一つの答えを与えていると考えられる．また地域景観とは，自然環境の活用という機能上の有用性に根ざしており，審美的まなざしによってのみ抽出されるものではないことをも示唆している．規範的風景や集団表象を抽出することが極めて困難な現代においては，たとえば生態学的優位性といった社会の価値のパラダイムの方から，それを実態的にも担保し眺めとしても表象する景観の発見と創造というアプローチが考えられるかも知れない．

c)二井による海景に関する研究[7]

目的：アテ山の見え方から漁師が海上の地点を同定するという事象に着目して，海上地名を特徴づける地景とその特色を明らかにすることを目的としている．

方法：全国の海図から山アテに関する海上地名を抽出し，その場所の同定に関わる陸上地形の見え方を地形データから立ち上げ，さらに視点を移動させた場合の見え方の変化との関係によって海上のエリアを特定している．

成果：特定された海上のエリアは漁場としての価値がある場所であり，地景の認識が生業にとって機能的有用性に根ざした知恵であることが示された．また，地景の認識にとって視点移動による見え方が変化することが重要であることが示された．

展開：地域景観は地域内を移動しながら体験するものであることに照らせば，眺めの変化の特異点に着目した視点となる場所（エリア）の同定というアプローチには，さまざまな展開可能性が期待できる．

なお，後述する京都大学における研究の中でも出村[8]による山の見え方のシミュレーションでは，複数視点からの同一対象の見え方の比較から地域景観の特色に迫ろうとしている．こうした視対象を特定した視点場領域の設定というアプローチには，趙[9]による景廊という概念を用いたものもあり，視対象の見え方に目が向きがちな地域景観の議論においてもっと重視されてよいと考える．

d)京都大学における見え方・見方に関する研究

京都大学における景観研究のひとつの流れとしては，透視形態としての見え方とそれを眺める主体の見方とを区別し，それぞれを，地形データを用いた透視形態のシミュレーションと言説とによってデータ化し，両者の対応を図るというアプローチがある．地域の環境特性の代表的項目である地形に対して，起伏の透視形態や可視領域という視点を特定することで初めて記述可能となる景

観として扱っている．前掲b, c)の東京工業大学における地相系景観・地景の研究をデジタル技術のレベルを上げて高度化するとともに，京都というフィールドの特性を活かした質・量ともに豊かな集団および個人表象データを活用した研究蓄積がなされているとも考えられ，この高度化によって新たに得られた知見は様々であり，本稿ではそれらを個別に指摘せず，他の研究によって得られた成果との関連で適宜言及する．

（３）地域住民の景観および地域認識の記述

a)根来・大内による沿岸漁村地域住民の景観認知に関する研究[10]

目的：地域住民の景観認知の特性を，認知している対象（領域と要素）の分布と地域の代表的視点からの可視・不可視との関係性から分析するとともに，複数の連担する地域の認知特性の関係性からより高域な地域の景観認知の構成を明らかにする．

手法：対象は沿岸漁村地域とし，継続的な研究によって，房総半島と伊豆半島の多数の集落でのデータを蓄積している．データはまず地域住民の景観認知については圏域図示法を用いたアンケート調査によっている．わがまち，山，海の領域，ランドマーク，日常ルート，および領域設定の手がかり（認知領域の構成要素）を把握している．可視不可視についてはわがまちの賑わいの中心を視点とした可視不可視領域を地形データをもとに判別している．この二種類のデータの組み合わせによって認知特性について考察している．

成果：認知において可視である認知対象（明在系）と不可視であるが認知されている対象（暗在系）という概念を用いている点に特色がある．この概念を鍵として，長年にわたる多くの対象地データでの蓄積から，明在系，暗在系のそれぞれの認知対象を具体的に明らかにするとともに，地域の連続としての広域に対しての考察を可能としている．

課題と展開：可視不可視の判別が地域ごとに代表的視点一箇所からのみ行われているため，地域内の日常的移動によって可視となる要素も暗在系に組み込まれている可能性が大きい．視点場となり得る複数地点からの見られ具合を含めた分析による発展がありえよう．それを行った上でなお不可視でありながらも認知される対象を探ることは，広域地域連携による地域計画論への展開が期待できるように思う．

b)山下による流域に着目した研究[11]

可視領域と土地利用データという平面的に管理される土地の状態記述と，透視映像としての眺めの画面構成およびそれを眺めた人の評価の関係性を分析した山下の研究では，流域という環境生態的にも重要な地域単位の景観特性の記述さらには計画に迫るためのアプローチであると考えられる．手法としては，対象河川上のすべての橋梁からの可視領域の抽出と，橋梁上からのパノラミックなヴィデオ画像の画面構成データ，さらにそれをみた被験者の評価を組み合わせた分析を行ない，流域を類型化している．こうしたアプローチからは，流域を意識させる地域景観の特性記述の方法を探るという展開が考えられる．

c)西名による地域住民の景観認識に関する研究[12][13]

目的：地域の景観を住民に評価させる場合，評価対象を予め選定することにそもそも問題がある．それを解決するために評価対象となる眺め自体を評価者が特定できるようにするため，自由記述によって住民の地域景観認識を捉えることが試みられている．認識の対象とそれを好ましい・好ましくないと判断する評価のプロセスを明らかにする．

手法：評価対象を限定せず，日常的かつ身近に体験する景観のなかから好ましい・好ましくないと感じる景観を指摘（自由想起または写真撮影）させるとともに，それを挙げた理由を言葉によって記述させる．その結果から得られる，対象物・状態・理由，シーンの捉え方などのデータの関係性を分析する．

知見：好ましい・好ましくないという評価軸を指定した実験であるが，抽出された景観自体の多様性とともに，それらに対する評価は景観構成要素の視覚像としてだけなく，雰囲気から受ける心理的印象や利便性・安全性などに基づいており，評価プロセスも多様であることが示された．単純に景観構成要素に評価を還元できないこと，好ましい・好ましくないという総合的な評価軸には，個人によって様々な解釈がありえることが示唆されている．

課題と展望：「多様」な状態をあえて全体的傾向に集約せずに提示している点が興味深いが，その多様な状態を何らかの形で概念的に整理していくための議論が望まれる．

なお，人々の認識対象やイメージを採取するための技術と研究方法については，イメージマップ法やエレメント想起法などの手法が確立されているが，眺めという透視形態的視覚像のレベルで認識を採取するための方法としては，写真投影法，平手ら[14]によるキャプション評価法などがある．これらでは写真や映像だけでなくそれに付記した言葉の分析が重要となる．インタビューやブログマイニングなど大量の言葉の処理ツールがある中で，その処理過程と結果の解釈には依然としてプロセスの説明が困難な部分があり，留意が必要である．また，ふと

目に留まった眺めを作業抵抗なく記録し，さらにはリアルタイムに表示することは，デジタル技術によってかなり容易になってきている．こうした実験技術の展開は，新たな研究方法を可能とする．と同時に，実験に限らず日常的に眺めを記録する行為，さらにはそれに呟きというキャプションをつけてコミュニケーションをとる行為を繰り返すことは，主体の眺めの認識への姿勢に影響を与えることが，容易に想像される．こうした眺めの慣習の相違に起因する認識の違いを把握すること自体も，研究の目的となりうるであろう．

（４）主体の内面と眺めの双発的呼応の記述

a)池田による文学作品に描かれた景観に関する研究[15]

目的：文学作品を景観に対する認識を表現したデータとして評価し，作品中の空間描写を分析する方法を具体的に検討する．それによって，景観の特質に関する知見を得る．

方法：作品中に記述された場面に着目して，単語レベルで景観の概略（構成要素）をつかみ，文章のまとまりレベルでそこに表現されている景観の内容を篠原の景観把握モデルに基づいて平面図的・透視図的に書き起こす．作品の部分および全体を通して抽出された上記データの傾向を読み取る．

成果：文学作品における景観抽出の方法を示し実践している．景観の認識において，時刻の指定，眺められる理由（色や形態の目立ち具体，明暗のコントラスト，記憶のよみがえりのきっかけ，相互関係の導出），視覚以外の要素，が関係していることが読み取られた．

展望：対象とした作品に依存する結果である可能性は排除できていないが，成果として得た景観の認識に関する事項は，実際の景観体験や景観認識に少なからず影響しているであろう機能的な側面（迷わない，便利，快適，安全など）に関わらない，「ふと目に付く」，「なんとなく気になる」という種別の景観体験の特質を示しているのではないかと思われる．つまり，これといって公共性もなく，なにかの役に立つわけではないが，個人的には大切な景観の特質に通じることではないだろうか．

京都大学の山口[16]の研究によって得られた嵯峨野の風景体験の重層性とは，文学的イメージの追体験，視覚的風景の鑑賞，遊びをともなう風景鑑賞という3つの様態とされていた．こちらもいわば生業や生存という機能的束縛を離れた体験を中心とした個人の認識の表象であるという点で，類似点を見出すとするならば，地域景観体験の一つのレイヤーの特色を考える手掛かりとなるかもしれない．

また尾野[17]による「草枕」の描写と環境との対応についての研究では，勾配や眺望といった空間を移動する主体の身体が体験する感覚と小説に描写された主体の内面との対応を試みている．主体の閉じた内面と環境に意識を向けたことによる認知，その時その場所の環境の状態という３つのモードの呼応関係があることを示唆していると考えられる．またその呼応が移動にともなって展開することにも興味を覚える．移動という点からは羽藤ら[18]による遍路紀行文のテキストマイニングデータから主体の内面の変化と遍路経路との詳細な対照を行った研究も参照できる．

こうした極めて個人的で内面的な認識が，地形や場所の特性，眺めという実態と呼応するものであるならば，それらが多様な個人，私をつなぐ媒体となりえると考えられる．あらかじめ共有される公共的なものというフィルターを掛けない個々の私の景観体験の集積から，私たちの景観，私たちの地域を考える道筋が見いだせるかもしれない．

３．地域景観の議論と研究のためのメモランダム

以上にはなはだ不完全な既存研究レビューと，そこから自由に思考を展開することを試みた．それをもとに，さらにまた飛躍があるが，今後の地域景観の議論と研究を進めていく際に参照したいと自ら思う点を並列的に述べる．

①地域は移動によって認識可能となる

ひとつの視野にはおさまらない地域の眺めは当たり前であるが，地域内の移動とともに蓄積された景観体験の集積としてある．ある経路に沿ったシークエンス景観の体験だけでなく，断片的な移動の集積を含め，その記述を考えたい．これはすなわち景観に時間概念を取り入れることになる．その際，移動によってリアルに感じられる身体を主体と環境のリアルな呼応の媒体として位置づけたい．

②地域景観の認識には複数のレイヤーがある

地域で生活していくために有利となる機能的な背景から認識される景観と，これといって役に立たない，ふとしたとき目にとまる景観，さらに個人の内面を照射するような（景観によって逆照射されるような）景観体験，過去や不可視なはるか遠方の存在という時空のジャンプを意識させるような景観．たとえばこのような複数のレイヤーが地域の景観には存在し，主体にとってはこれらが混然となって認識されているといえるかもしれない．そのレイヤーをうまく掬いとるための調査と分析方法が考えられないだろうか．

③地域計画に景観を持ち込んだからには，新たなより良

い計画につなげたい.

例えば，環境と人間の暮らしの動的な調整を総合的に取り込んだ地域計画に対して，景観という観点からアプローチすることはできないだろうか．人のつながり，もののつながり，命のつながりが地域景観体験のなかで日常的に身体化されるような，計画の視覚的記述とはなんであろう.

④地域景観は平易で直感的に記述しなければならない

計画というプロセスが，その策定過程という直接的な意味だけなく，実体化においてまさに広く地域の人々とともになければならない以上，最終的な記述は平易で，直感的で，さらには愛らしいものでなければならない.

補注：

＊1）地域計画には都市計画も含む．対象地の状態が都市的であるか非都市的であるかを不問としてある規模以上の面的広がりを本論では総じて地域と呼び，それを対象とした計画を地域計画，その対象範囲において体験される景観を地域景観と呼ぶ．すなわち本稿における地域という言葉には都市と対照されるものという概念を含まない.

＊2）精緻な研究レビューの作法からは大きく外れるが，ある一連の研究のいずれかにアクセスできればその関連論文の検索はかなり容易にできる情報環境が整っていることもあり，本稿では関連する個々の論文の一覧を付すことは省略した.

参考文献：

1) 坂本 淳二：景観指標に基づく広域混住化類型と計画的課題について- 景観を視点とした混住化地域の考察その1．日本建築学会計画系論文集，no. 487，p.157-166．1996

2) 坂本 淳二：混在化地域における景観域の把握とその類型化 ： 景観を視点とした混在化地域の考察 その2．日本建築学会計画系論文集，no.504，p.127-134．1998

3) 北原理雄：名古屋東部丘陵地域の景観構造，日本都市計画学会学術研究発表会論文集，no.14，p.391-396．1979

4) 土肥博至，田中奈美，澤田幸枝，鈴木理恵：景観単位による地域景観の記述方法，都市計画論文集．vol.31，p.649-645．1995

5) 矢部 恒彦，北原 理雄，徳山 郁芳：小学校校歌に謳われた全国の地域景観イメージに関する研究，日本建築学会計画系論文集．no.472，p.111-122．1995,

6) 清水 祥雄，中村良夫：世田谷区の地相系景観に関する研究．造園雑誌．vol.53，no.5，p.205-209．1990

7) 二井昭佳，齊藤潮：動的視点における地景の持続性について―海上地名「～出シ」を対象として，土木学会論文集D．vol.63，no.2，p.182-189．2007

8) 出村 嘉史，大島充功，山口敬太，樋口忠彦：京都東山の見かけ高さに基づく主峰視点領域の分布特性，土木学会論文集D．vol.66，no.1，p.46-53．2010

9) 趙 城埼，佐藤滋：景廊による都市の景観構造の記述に関する研究―山あて景観を特徴とした近世城下町を基盤とした都市を対象として．日本建築学会計画系論文集．vol.73，no. 32，p.2165-2172．2008

10) 根來 宏典，大内 宏友：地域住民の景観認知における可視領域とその構成について．建築学会総合論文誌．no.3，p.102-107．2005

11) 山下三平，中村直史：流域景観の地理的情報と意識評価の統合．土木学会景観・デザイン研究論文集．no.1，p.97-106．2006

12) 山本 一馬，大石洋之，村川三郎，西名大作：東広島市域における地域住民の景観選好特性に関する研究．日本建築学会環境系論文集．no.587，p.53-61．2005

13) 大石洋之，村川三郎，西名大作：被験者の自由記述に基づく地域景観の選考特性に関する研究．日本建築学会環境系論文集．no.599，p.135-142．2006

14) 古賀誉章，高明彦，宗方淳，小島隆矢，平手小太郎，安岡正人：キャプション評価法による市民参加型景観調査-都市景観の認知と評価の構造に関する研究その1．日本建築学会計画系論文集．no.517，p.79-84．1999

15) 池田朋子，紺野昭：文学作品の空間描写から都市・地域景観を読み取る手法に関する研究―小説『城のある町にて』をケーススタディとして．日本建築学会計画系論文集．no.450，p.121-130．1993

16) 山口敬太，出村嘉史，川崎雅史，樋口忠彦：近世の紀行文にみる嵯峨野における風景の重層性に関する研究．土木学会論文集D．vol.66，no.1，p.14-26．2010

17) 尾野薫，嶋健志郎星野裕司増山晃太：『草枕』における環境の捉え方に関する研究．土木学会景観・デザイン研究講演集．no.5，2009

18) 亀田真宏，羽藤英二：空間一行動パターンと文章表現に着目した遍路空間の景域分析．土木学会景観・デザイン研究講演集．no.5，2009